

家族を守った祖父を 内なる誇りとして

栗林忠道がこよなく愛した「たこちゃん」こと末娘のたか子さん。その長男で、栗林の孫にあたるのが、いま衆議院議員として活躍中の新藤義孝氏だ。自らに栗林の血が流れていることを「内なる誇り」とする新藤氏に、母と祖母から聞いた栗林の思い出を語って頂いた。

新藤義孝

Shindo Yoshitaka

●衆議院議員

栗林が 「帰ってきた」日

私は物心ついた時から、母たか子と祖母義井からあなたのお祖父さんは、戦争で立派に戦った人だったと聞かされてきました。

しかし母も、祖父とは十歳の時に別れてしまっています。そのため、小さい頃の思い出しかないのですが、非常に優しい人で、とても可愛がってもらった記憶ば

かり残っているそうです。

祖父は硫黄島いおうじまに行く前は、東京の近衛師団長このえでした。官舎から出かけていく前に、必ず「雨降りお月さん」のレコードをかけて、それに合わせて母が歌って踊るのを目を細めて見てから、仕事に出かけていったそうです。

しかし、祖父が家族に何を話したのか、どんなことをしたのかといった具体的な思い出は、母も祖母もあまり語ろうとしませんし

た。それは祖父が亡くなったあと、戦後の大混乱のなかで二人が本当に苦しい生活を送ったせいかもしれません。祖父のことを思い出そうとすると、その辛かった日々も甦よみがえってきてしまうのでしょうか。

祖母は戦争で最愛の夫を失っただけでなく、今まで働いたこともなかったのに、自力で三人の子供を育てなければなりません。一度は山梨の親戚の家に疎開そかいしますが、すぐに腸チフスにかか



新藤義孝氏(左)とご両親。中央がたか子さん

ってしまいます。そこで長女と実母が看病しますが、逆に病気がうつり、その二人が亡くなるのです。それでもうその家にはいられなくなって、東京に戻りました。そこから寮の住み込みの賄まかいになり、慣れない保険の外交をしたりして、極貧のなかでも母を大学にまで行かせています。

私にとって祖母は、本当に淡々として穏やかな人でした。苦勞くろうするなかで、どこか普通の感情から

超越してしまっただんでしょね。怒ったところも声を荒らげたところも見たことがないかわりに、うんと喜ぶこともなかった人です。

しかし、母から聞いた祖母のエピソードで、強く心に残っていることがあります。ある朝、祖母がにこにこして、「久しぶりにお父さんの夢を見た」と話したそうです。そして、その夢のなかで「お父さんが今帰ったよと笑っていた」と。その時の祖母は、母が一度も見たことがないほど、本当に嬉しそうだったそうです。

「珍しいこともあるわね」なんて家族で話していたら、その日の午後、「米国より小笠原が返還されました」と政府から家に連絡がきたそうです。

硫黄島からは祖父の遺骨も遺品も何一つ帰ってきていません。しかし、祖母の帰ってきてほしいという思い、祖父の帰りたいという思いが、小笠原返還の時を選んで、この不思議な夢を見させたのではないのでしょうか。

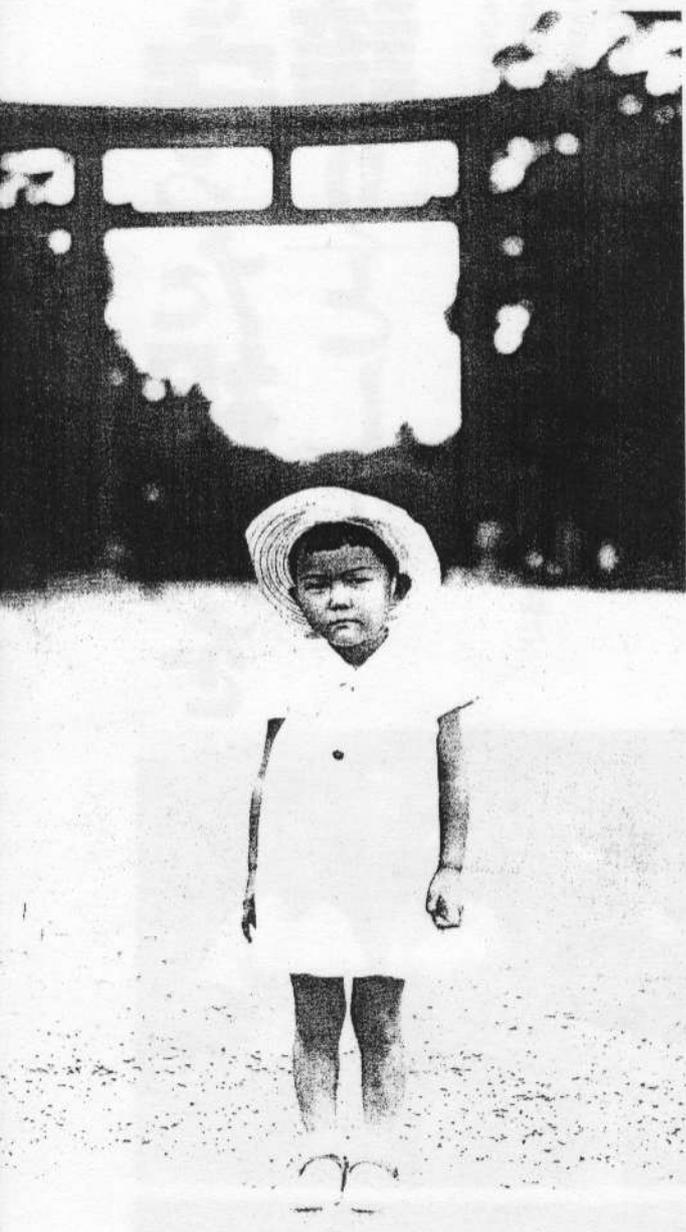
祖父のことを語るのは「供養」である

栗林忠道という人は、私にとって、そして家族にとつて「内なる誇り」です。母は苦しい生活を乗り越えて幼稚園の園長になり、七千人の子供を育てあげました。祖母にしても母にしても、あれだけ立派に戦った祖父に対して恥ずかしくないように、自分たちも責任を果たさねばならない、と強く思ってきたのでしょう。

私が祖父を誇りに思っているのは、その人間性です。私がこれまで政治家として貫いてきたことは、正義を通すことと既成概念を振り払って、今最も合理的なやり方は何かを考えること。そのために、いろんな圧力を受けても、逃げずに自分の信念を捨てずに行動してきました。

祖父をはじめとして、硫黄島ではまさしく最悪の状況の中で、家族を守るため、逃げずに自らの役割を全うしようとした人たちがいた。

私たちは、そんな日本人がいたことを誇りに思い、忘れずに尊敬の念を持たねばなりません。一方で、そんなひどい状況に国民を追いやるまで国が方針を誤ったことは深く反省し、二度と繰り返さないようにしなければなりません。そこそが英霊への本当の供養になると思います。三年前に九十九歳で祖母が亡くなり、その翌年に母が亡くなった今、孫の私が祖父のことを語り、追悼を続けていかねばならないと思っています。



幼い頃の「たこちゃん」ことたか子さん